

## ALOS パンシャープン立体視画像による地形特徴の判読 その2:双葉断層

## Interpretation of geomorphological features by ALOS pan-sharpened stereo imagery. Part 2: Futaba Fault

# 大村 一夫 [1]; 相馬 孝志 [2]; 白沢 道生 [2]; 横山 隆三 [2]

# Kazuo Ohmura[1]; Takashi Souma[2]; Michio Shirasawa[2]; Ryuzo Yokoyama[2]

[1] 大和地質研究所; [2] 岩大・地連センター

[1] Daiwa Geological Lab.; [2] CCRD, Iwate Univ.

パンシャープン立体視画像(以後、立体視画像と略す)は、ALOSのPRISM(解像度2.5mの立体視センサ)とAVNIR-2(解像度10mのカラーセンサ)のデータから合成される。立体視画像そのものは、衛星軌道に沿った観測幅35km及び地表解像度2.5mのカラー立体視画像となっており、縮尺1/6,000程度まで拡大表示できるもので、この画像は共同発表者の横山・相馬・白沢らにより作成された。通常、立体視画像はアナグリフとして赤青メガネで観察するように加工しているが、必要に応じて実体視鏡用の画像にも加工できる。

立体視画像は、広域のエンドレス&シームレス(衛星軌道に沿って)の観測結果であることから、地形情報の判読に適している。大判プリント出力された立体視画像を、複数の人が同時に観察することによって、異なる専門分野の見解を総合した判読結果を短時間内に得ることができる。

今回、ALOSが福島県浜通り上空を通過した時(2007/8/15)の観測画像データによる立体視画像が完成した。立体視画像には、双葉断層以外にも、畑川断層、阿武隈山地東端部、沿岸の海成段丘分布地域などが含まれており、地形学的及び変動地形学的に興味のある種々の事象を観察できるものとなっている。

さらには立体視画像と空中写真及び航空機レーザ計測データを併用することによって、地形判読の精度を改善できる事も期待される。